



山本有三 集

現代日本文學全集

31



筑 摩 書 房 版



山本有三集

昭和二十九年三月二十日 印刷
昭和二十九年三月二十五日 發行

著者 山本有三

發行者 古田 晁

印刷者 山田 一雄

發行所 筑摩書房

電話小石川(92)五一・二〇五七
振替 東京 一六五七六八

クロム 日本クロス工業株式会社
印刷 株式會社 精興社
製本 株式會社 和田製本所

山本有三集 目次

波	五
真実一路	二九
路傍の石	二五五
こぶ	三六三
同志の人々	三八一
ウミヒコ	三九五
ヤマヒコ	三九五
芸術は「あらわれ」なり	四〇
錯覚	四〇四
一人一回かぎり	四〇五
すわり	四〇六
正方形と円	四〇八

山本有三(唐木順三)……………四〇

解説……………四二

年譜……………四三

装幀 恩地孝四郎

山本有三集

自然は急が

ない

有こ

行介(コースケ)はいつもの停留所でおりました。おりのとき、帽子に手をやらなくてはならないほど、風が強かった。

彼は赤っ茶けた風に押されて歩いて行った。とき／＼、紙くずや、こっばなどが、トンボがえりをしながら、彼のズボンのあいだをすりぬけて、ころがって行った。

行介はオーパーのえりを立てていたけれども、それでも、カラーの下まで、つめたい空気が流れこんできた。そのうえ、どうかすると、クギでも投げつけられるように、お米粒の砂がパラパラと、彼のえり首に落ちてきた。

彼は、横丁にはいったら、いくらか風がよけられるだろう、と思った。急いで、うちのほうへ曲がる最初の横丁を曲がった。しかし、し

ばらくしてから、「きょうは寒いから、帰りに肉でも買ってこよう。」けさ、出がけに、妻にそう言ったことを思い出した。

そうだ。肉を買って行ってやらなくては。彼は、また電車どおりに引返して、突きあたり肉やにはいった。

板まえが肉を切っているあいだ、行介は厚いマナイタの前に突っ立って、ホーチョーの動きをぼんやり追いかけていた。なま肉のおいさを鼻を打って、彼の胃ぶくろを驚くほど波立たせた。

マナイタの上に斜に落ちていくゆう日が、鋭い刃ものにあたって反射すると、ちょうど油でもはねた時のように、天じょうや、肉をぶらさげである大きなガラス戸ダナに、きらつ、きらつと、ちいさい光をはねかせた。

突然、ふわつとしたものが、ひざのあたりにからみついた。彼はびっくりして下を見た。ふたりの新聞が風に吹きまわられて、飛んできたのだ。なんのことはない、木の根かたに落ち葉が吹き寄せられるように、彼の足もととは、一時の吹きだまりになったのだ。

「こんなところに突っ立っていると、ざまがないや。」

心の中でつぶやきながら、彼はいま／＼しそのうに新聞を往来にけとばした。しかし、べつとりと張りついたようになつて、ふる新聞はなかなか足から離れなかった。彼はしかたがなしに、ほこりだらけの紙を指でつまんで、かざし

もに放してやった。ぼろ／＼に破れた。大きな紙きれは、また往来をころがって行った。

肉やの店さきに立つたびに、いつも思うことだが、どうも、この、待っているあいだぐらい、まの悪いものはなかった。

板まえは切った肉を竹の皮の上に薄くのばして、丁寧にならべていた。それから、ハカリの上に乗せて、少しばかりの肉をたしたり、へらしたりしていた。行介はお預けをくった犬のように、黙ってそれをながめていた。

「見並(ミナミ)君。」

肩のところで声がした。ふり向くと、一つのお顔に突きあたった。園田(ソノダ)だった。

行介はちよつとしゃべったが、向こうが笑っているの、彼もてれ隠しに、ほ／＼えんで見るよりほかはなかった。

「ごちそうだな。」

「いやあ、とんだところを見つかっちゃったな。」

「あい変わらずだね。」

園田の顔には笑いがまだ残っていた。

「何があい変わらずだい。」

行介はおつかぶせて言った。「あい変わらずのろいね。」「あい変わらず女房孝行だね。」「あい変わらず……」園田のあい変わらずに負けていたら、どんなことになるかわからない、と思つた。

「いや、あい変わらず気がきいてるってんだ。」
 「ふん。」
 「おれがくることを察して、牛肉を買っておこなどは、感心だよ。」
 「たぶん、そうくるだろうと思つていた。おい、心配しなくてもいいよ。君にはコマ切れを買つておいた。」

「コマ切れ、コマ切れか。」

「何を言っているんだい。みつともない。」

「おい。――女房にコマ切れを買つて帰りけりつてのは、どうだい。」

「どうもうるさくつてかなわないな、迷句をひねくるやつが、そばにいと。」

「しかし、実感があつてなかく／＼いいだろう。」
 「うん、たび／＼コマ切れを買いつけてると見えて、その点はさすがだね。」

「まだあんなことを言つてやがる。もういい加減に降参しろよ。」
 「はムム。」

「お待ち遠さま。」という声が響いた。そして、竹の皮つづみが行介の前に突き出された。彼はそれを受け取ると、園田とつれ立って肉やの店を出た。

「だが、ぼくがあすこにいること、よくわかつたね。」

「なあに、君の姿は三丁もさきからわかつていた。」

「どうして。」
 「ぼくはこの道をやってきたんだもの、つきあ

たりの店に、君の丸まった背なかが出つばつていりゃ、いやでも目につくじやないか。おれは道々考えてきたんだが、どうもなんだね、ネコ背つてやつは、なかく／＼句になりにくいね。」
 「バカにするな。じゃ、君は、ぼくのところへ行つたのかい。」

「うん、もう帰っているころだと思つて。」

「それなら、待つていてくれればいいのに。」

「おれもそうしようと思つたんだが、だれもいなかったもんだからね……」

「かまやしない。あがりこんで待つてりゃいいじやないか、ほかの／＼うちじゃあるまいし。」

「ところが、戸がしまつてゐるんだ。引つぱつてみたけれど、あかなかつたから、しかたがない、帰つてきたのだ。」

「そうか、そりゃ失敬した。じゃ、女房、どうかへ買い物に出たんだろう。」

きょうは土曜日だし、ちよ／＼と園田もやつてきたところだから、久しぶりでひと口やりたいと思つて、行介は途中、取りつけのさか屋に寄つて酒を頼み、うちに帰つた。うちは、園田が言うように、戸がしまつてゐた。妻はまだ帰つていないらしい。彼は裏ぐちにまわつて、あま戸のかけ金をはずした。

一ノ三

なかはまっ暗だった。

行介は手さぐりで電燈を探し、スイッチをひねつた。それから、急いで玄関に行つて、格子

(コーシ)とあま戸をあけた。

「いや、お待ちどお。」

「ほんとうにお待ち遠さまだ。なんだね、肉やのマネイタの前に立たされるのも、いい凶じやないが、戸のしまつたうちの前に、ちよ／＼と突つ立つてるのも、あんまりありがたいもんじやないね。」

園田はへらず口をたゞきながら、あがつてきた。

行介は、なが火バチの横にすわろうとすると、煮えたぎつた鉄ビンが、重たいフタをパタリパタリ押しあげているので、彼は立つたまゝ、あわてて鉄ビンをわきにおろした。「戸じまりをけは、外に出て行くくらいなら、火をいけて行けばいいのに。」腹の中で、彼はるすの妻にこごとを言つた。

しかし、じつを言つと、赤々とおこつてゐる火は、吹きつつあらしの中を、冷えきつて帰つてきたからだには、この上もなくうれいものだった。ふたりは火バチの上に手をかざしながら話し合つた。

園田がやつてきた用むきは、金のことだった。まだ来月と思つてゐた細君のお産が、急におとといあつたものだから、てんでこ舞いをしてしまつた。で、五十円か、三十円ばかりほしい、と言ふのだった。ふたりは、しよ／＼ちゅう、このくらの金を貸したり、借りたりしている仲だった。園田はずほらのように見えて、案外かたい男で、金銭でまぢがいのあつたことはな

った。ことにおもしろいのは、それを返しにくるとき、味の素だとか、塩せんべいだとか、その利息に相当するくらいのを、いつもきつと持ってくるのだ。行介も、借りたときは、やはりそうすることにしていた。

園田の話は事情が事情だし、それに、ちようど三十円ばかり手もとにあったから、さっそく用だてることにした。行介はその話が一段落つくと、台どころに立つて行つて、ネズミイラズだの、戸ダナだのを、しきりにガタビシいわせた。

「何を見つけているんだい。」

「おかしいな。どこへしまいこんじまったのかしら。どうも女房がいないと、しょうがないな。」

「おい、ごちそうなら、また、ゆっくりなりにくるよ。」

「まあ、そんなことを言わないで、ぼくがせつかく買ってきたんだから、肉を突っ突いて行けよ。」

「しかし、奥さんがいないところだからね……」

「きょうはバカに遠慮するじゃないか。」

「そういうわけでもないが、金を惜りたり、ごちそうになつたりしちゃ、少し話がうま過ぎるからな。」

「いやなことを言うやつだな。そんなことを言つてるひまに、いいから酒でもつけといてくれよ。」

今しがた小僧が持ってきた酒のトックリを、

園田の前に押しやった。

「驚いた。細君がするすと、おれのほうにまで雷がおつこつてくる。」

「つまらないことを言うなよ。」

「しかたがない。細君が帰ってくるまで、おかん番をつとめてやろう。」

「それだ。恩をきかせてから飲もうつてんだから君は太い料けんだよ。」

「なに、そんなことはありゃしないが……」

「ナベ、ナベ、ナベと。いったい、どこへ入れちまやがったのかな。」

「なんだい、牛ナベかい。」

「うん、困つたな。こゝになければと——」

「そのぐあいじゃ、こゝのうちでは、めつたに牛肉なんか食わないと見えるな。」

「飲まないさきからその調子じゃ、飲んだら何を言いだすかわかりゃしない。」

「おい、いったい、そんなに飲ませるつもりかい。」

「すぐそんなことを言う。だから、酒のみはいやしうってんだよ。」

「そのものをはつきり言うもんじゃない。酒がはいらないうちに、まっかになつてしまふじゃないか。」

一ノ四

「へんなもんだな。自分のうちでいながら、台どころときたら、どこに何があるんだか、さつぱりわかりゃしない。」

「実際なんだね。いるときには、さほどにも思わないものだが、いないとなると、これで、不自由なものだね。」

「おい、つまらない親切なんか、よしてくれよ。」

「だが、そういうもんじゃないか、いったい、細君なんてものは……」

「あつた、あつた。なあんだ。こんなところに突っこんであつたんだ。」

米ビツの横に二寸ばかりあきがある、その狭いあいだに、牛ナベはむき出しのまま立てかけてあつた。

「そうか。じゃ、いよ／＼君のしりれてきた牛肉にありつけるわけだね。」

「今までは、どうなることかと案じていたって、言やしないか。は／＼、さあ、これでネギさえあれば、文句はないぞ。ところで、ネギはと……」

行介は台どころのあげ板を開いて、下をのぞいた。暗いなか白く光つたものが十本ばかりそり返つていた。彼はそれをみんな取り出して水で洗い、あぶなつかしい手つきをしながら、ザクリ／＼切りはじめた。

こうしてネギが買つてあるところを見ると、妻は彼が肉を買つてくることを、忘れていたものとは思えない。しかし、今もって帰つてこないというのは、どうしたわけなのだろう。彼の帰ってくる時間は充分承知のはずだし、それに、その時刻に、うちをるすにしようなこ

とは、今までに、ついぞなかったことだけに、行介はホーチョーを動かしていながらも、考えは絶えずそこに走っていた。

「おい、カフスがぬれるよ。」

園田の声で、行介の考えは断ち切られた。

「洋服を着かえたらいいじゃないか。」

「いや、めんどくさい。もうじきだよ。」

「それじゃ、細君のエプロンを前にかけるんだね。そうして、ついでに、あたまたに白い帽子をのけるんだ。」

「バカにするな。」

「おい、新まえのヨックさん、指を切らないように頼むよ。」

「大丈夫だよ。だが、こんなことをしていると君と自炊していたころが思い出されるね。」

「あのときもさ、君はよく指を切ったぜ。おかげで、ぼくは、なんと血ぞめのタクアンを食わされたかしれやしない。」

「しかし、君がいくらかでも血のめぐりがよくなったのは、あれからだ、と思や腹も立たないだろう。」

「へん、あきれてものも言えやしない。——そろそろおチョーシをつけ始めようかね。」

「なんだい。まだやらなかったのかい。」

「まだやらなかったかって、牛ナベが見つからないうちから、おかんをしちゃ、つき過ぎちまうじゃないか。」

「なるほど、大きにそうだね。——おい、トックリは茶ダンスにはいっているぜ。」

「如才はないよ。もうちゃあんと出してある。」
園田はトックリに酒を移して、しずかに鉄ビンのなかに沈めた。

「え、君。この、ポチャリという音は、なんとも言えないね。」

「そうだね。」

「そうだねは、話せないな。なんじゃないか、芝居で言や、これは幕あきの本木みたいなものだ。こいつがボヨリだの、ポチャリだのときた日には、酒の味はなくなっちゃうからね。おれは女房にだって、こいつばかりは任せはしないよ。」

——女房ってば、奥がたはバカに遅いじゃないか。」

一ノ五

「女房なんかいなくなつて、かまやしないよ。さあ、できた。」

行介は切ったネギをサラにもつて、洗った牛ナベといっしょに茶のまに運んだ。

やがて、肉がジューク／＼煮えだして、火バチの上は急に活気づいてきた。

「酒もついたし、肉も煮えてきたし、もう、なんにも言うところはなないや。」

二、三杯ですぐとろんとしてしまふ行介は、目がねの曇りを気にして、度の強い近眼鏡をはずし、息を吹きかけては、しきりにハンケチでふきはじめた。

「これで女房さへ帰ってくりゃ、だろう。」

園田はゆるやかに、杯をくちびるのところに

持つて行きながら、少し目じりをさげて、行介の顔をのぞいた。

「なあに、女房なんか、どうだつていいさ。」

「なんとか言つてら。」

「全くだよ。」

「そんなことを言うと、向こうじゃ、もう帰つてまいりませんよ、と言つてくるぞ。」

「ところが、そんなのはちがうんだからね。」

「あきれた。こりゃ手ばなしだ。」

「まあ、なんにもありませんけれども、どうか充分めしあがってください、つて、ところかね。おい、君。こっちのほうで煮えているぜ。」

「おれはもうたくさんだよ。おらあ帰るよ。バカバカしい。」

「さようでもございませうが、これは手まえが買つてまいった肉でございませすし、こちらは手まえが刻んだ……」

腹の底には何かつめたいものがよどんでいながら、行介はへんにはしゃぎたかった。しかし、冗談を言っているうちに、自分でも空しくなつて、途中で急にやめてしまった。

園田は帯のあいだから時計を出した。行介はそれを見ると、おどすように、

「おい、帰るのはまだ早いぞ。」

「う、うん。」なま返事をしながら、園田はなお時計をながめていた。

「もう少ししろよ。」

「う、うん。——しかし、遅いな。」

「まだ、そんな時間じゃないだろう。」

「いや、奥さんがさ。——買い物にしちや、少しおそ過ぎるじゃないか。」

「……………」

「どこへ行ったか、心あたりはないのかい。」

「そうだね。」

「おい、隣へ行って聞いてこいよ。ちよつとお尋ねいたしますが、手まえどもの家内はどこにまいましたらうって。」

「なんだ。本気にしているよ、すぐちやかしやがる。」

「しかし、ほんただよ。何かことづけがあるかもしれないぜ。」

「いいよ。女房なんか、いたって、いなくなつて。君さえいれば。さあ、一杯いこう。」

「おい、おれを女房と取っちがえちや困るよ。ぼくは奥がたが帰ってくりや、立ちどころに引き取ろうって人間なんだからね。」

「そう帰る／＼っておどかさなよ。」

「いや、そういうわけじゃないけれど、なにしろ、うちのほうがなんだからね……………」

「あ、そうか。はゝゝゝ。——そんなに子どもってかわいもんかね。」

一ノ六

「まあ、持つてみるよ。」

「いやにおやじぶるな。」

「しかしね、君……………」

「驚いたな。これが当年の園田だと思つと。」

「まあ、なんとも言うがいいさ。人間、子ども

もを持たないうちは、まだ人生の半分しかわからないんだよ。その意味で、君なんかは半人まへぐらいの値うちつきりないんだぜ。結婚して、まだやつと一年だらう。」

「おい、はじめておやじになつたって、そう感じるなよ。」

「いや、べつに威張りやしないが、なんだよ、君、子どもってものは……………」

「子ども、子どもって、そんなに珍しがることはないじゃないか。ぼくなんか、子どもなら、なんにんでも持つているよ。」

「なんにんでも？」

「うん。」

「おい、ほんとうの話かい。」

「ほんとうさ。学校へ行けば、子どもなんかかうようよしている。」

「なあんだ。小学校の生徒か。君はたちが悪いよ。すぐ人をかつぐから。」

「いや、かついだんじやない。まじめな話だ。」

「バカ／＼しい。学校の子どもなんか、なんにんあつたって、しかたがないじやないか。」

「そんなことはないさ。」

「いや、君がなんと言つたって、他人の子じやだめだよ。自分の子でなくつちや。どうも、小学校の先生なんて、しょうがないね。こんなことが、わからないんだから。」

「何がしょうがないことがあるものか。自分の子だの、他人の子だのと、区別をつけるようじや、学校の教師はつとまらないよ。」

「そりや教壇に立つた時の話だ。まあ、自分の子どもを持つてみるよ。どんなもんだか。」

「いや、そんなものは当分まっぴらだね。」

「はゝゝゝゝ。実際、女房さえ食わせられないんだからね。——おや、もう九時になる。こりや驚いた。君、すまないが、ぼく、失敬するよ。なにしろ、赤んぼと産婦をおきつばなしなんだからね。」

「そうか。そりや悪いことをしたな。あんまり引きとめちやつて。」

「なあに／＼。じゃ、奥さんが帰つたら、どうかよろしく。」

「近いうちに、赤ちゃんを見せてもらいに行くよ。」

「うん、是非やつてきてくれたまえ。」

園田が帰つたら、家のなかは急にひっそりとしてしまった。行介はつまらなそうに、食器の取り散らされているなかに、ごろりと横になった。そして、今まで園田がすわっていた座ぶとんを、寝たまゝ腕をのびして引つぱり寄せ、二つに折つて、あたまの下にあてがった。

牛ナベは、つゆが切れたとみえて、ジイ／＼火バチの上でうなつていた。焦げつくような異臭が鼻を突いたけれども、彼は起きあがろうともしなかった。

そのとき、裏のほうで何かガチャガチャーンというはげしい音がした。妻が帰ってきたのか、とも思ったが、それにしては、少しすぎる物おとだった。隣の物ほしザオが吹き

落とされたのかもしれない。外はあい変わらず風がひどいらしい。

一ノ七

行介は突然むっくり起きあがって、自分の机のところに行った。彼女は急な用事でできて、外出したのかも知れない。何か書いたものがあるか、いや、引きだしの中まで調べたけれども、それらしいものは見あたらなかった。

いったい、きぬ子はどこへ行ったのだろう。彼にはまるで見当がつかなかった。園田が言ったように、実際、隣へ行って聞いてみようか。しかし、それもあんまり気がきかな過ぎる。第一、何かことづてがあつたくらいなら、さつき、裏ぐちをあけてるときに、隣のおかみさんはおむつを干していたのだから、あのとき、ちよつと言ってくれそうなのだ。黙っていたところをみると、隣にも、なんにも言つて行かなかつたものに相違ない。してみれば、そう手まの取れる用事とも思えない。それなのに、時計はもう九時を過ぎていた。

どうかしたら、また、おやじが……

きらつとその考えがきらめいたが、行介は強くそれをうち消した。いくらなんでも、また、おやじがそんなことをしようとは考えられなかつた。近ごろは非常におとなしくなつていようだし、ことに、ふたりの結婚を心から喜んで

いたことは、彼にもはつきり見えていたのだから……

あるいは、だれかに誘われて、活動でも見に行つたのだろうか。いや、するにそんなことをする気がいはない。見に行くなら、彼が帰ってきてから行つても、充分まに合うはずだ。

行介は今はじめ知つたように、あわてて牛ナベを火バチからおろした。ネギがまっ黒になつて、ナベにこびりついていた。

彼はチャブ台のそばにおいてあつたさか屋のトックリを引き寄せた。振つてみると、まだいくらか残つていらしい。彼はついでに飲み、ついでに飲み、ありつたけ飲んでしまった。ひや酒が妙にはらわたにしみ渡つた。

大きなあくびをして、彼は腕をのばした。からだかひどく窮屈だな、と思つたら、洋服を着かえてないことに気がついた。

彼は大儀そうに立ちあがって、タンスの前に行つた。そこには、着がえがちゃんと疊んであつた。彼は妻の心をうれしく思いながら、洋服をぬいで、ふだん着に着かえた。しかし、うしろから着せかけてくれる、やさしい手のないことが、ものたらなかつた。

それから、クツ下をぬいでタビをはこうとすると、足のさきになにかカサリとさわつたものがあった。彼はごはん粒を踏みつけた時のような、いやな臭もちがした。

「なんだらう。タビのなかに。」
彼はへんな気がしながら、タビを裏がえして

振つてみた。四角い、桃いろのものが、こぼれ落ちた。

封筒だつた。おもてに「先生さま」、裏に「きぬ子」としてあつた。

バカなことをしたものだ。タビの中に手がみを入れておくやつもないものだ。と、彼は思った。しかし、妻がタビの中に手がみを入れておくことが、あまりに尋常でないので、行介はある恐れをいだきながら、ふるえる手で封を切つた。

一ノ八

先生、おゆるしくください。何もかもあたしが悪いのです。

すっかりお話をしようと思つたのですけれど、それがあたしにはどうしてもできないのです。すみません。すみません。

先生、どうかおゆるしくください。おゆるしくくれ、もおからだをお大事に。

先生さま
きぬ子

行介は手がみを讀むと、一層不安になつた。

ほんやり感じていたものに、今、ゴッソんと突きあたつたような気がした。しかし、おゆるしくくださいとは、何をゆるせということなのか。お話したいことがあるのだができない、というのは、いったい、どんな話なのだろう。その点

になると、彼はまた、やはり、なんにもわからなかった。

あるいは、男でもできたのであろうか。けれども、それについて思いあたるようなことは、彼には一つもなかった。しいて考えれば、近ごろ、いくらかそわ／＼していた、と思われ、らしいなものであった。

ひょっとしたら、さつきもちよつと心配したように、父おやがまた何かをたぐんだのかも知れない。あのおやじのことだから、それはやりかねないことだ。きぬ子の手がみをタビの中にそつと入れて行ったということも、おやじにけどられない用意かもしれない。

彼はそう思うと、もうじつとしてはいられなかった。なんにしても、あれのおやじのところに行くのが、第一だ。よし、彼がかどわかったのではないにしても、彼のところに行けば、きつと様子がわかるにちがいない。行介は戸じまりをして、外に出た。

おやじのうちは、行介が奉職している小学校の近くだった。お、川を越した向こうだから、かなり遠いけれども、毎日かよい慣れている道だけに、彼はそれほどにも思わなかった。

やがて、彼は路地の奥の、その家の前に立った。もう寝たとみえて、中は暗かった。ことによると、まだ帰らないのかも知れない、とも思ったが、とにかく、彼は声をかけた。

「今晚は、もうおやすみですか。」
「だれだね。」

中から、すぐ答えがあった。おやじの声である。行介は、しめたと思った。

「わたしです。」

「あ、あんたか。ちよつと待っておくんなさい。」

あま戸のすきから急に光が流れてきたと思うまもなく、戸が開かれた。

「どうもおやすみのところを。」

「なあに。寒いもんだからね、寝どこにもぐりこんじゃあいたが、まだ眠ったわけじゃねえんですよ。——今、火を起こしますから……」

おやじの字平はたきつけを持ってきて、火バチに火を起こしはじめた。

「いや、火も何もいりません。」

「外はえらかったでしよう。今夜は少ししみが強いからね。どうも、この風がやんでくれねえと……」

「おとつあん！」

行介はすぐ事件の中心にはいって行きたかった。話題を変えするために、彼はきつぱりしたことは字平を呼んだ。しかし老人は、たきつけの上に炭を積むことに熱中しているらしく、返事さえしなかった。

「おとつあん！」

もう一度、呼んだ。

「え。」

「きょう、きぬ子がこなかったでしようか。」

「うんにゃ。」
火バチの中へ首を突っこんだまゝ、字平はそ

っけなく答えた。

こいつ、しらばっくれている。それで、首をあげないではないか。行介はそんな気がした。そう思うと、キツネのように口をとがらせて、火を吹いている字平の顔が、いっそう疑わしく見えてきた。そして、息を吸ったり出したりするたびに、ひたいのあたりが急に赤くなったり、暗くなったりするのも、火が反射するためばかりではないようにさえ思えた。

一ノ九

「おきぬは——こゝんとこ、さつぱり——きません。」

字平は火を吹きながら、とぎれ／＼のことはで言った。

「そうですか。ぼくは、また、こつちにきてることとばかり思っていました。」

「うんにゃ、こやしません。たまには顔を見せてもれえてえと思ってるんだが、近ごろはイタチの道でねえ。——あ、やつと起こった。さあ、どうか。——おや／＼、こりゃ鉄ピンに湯もなくなってる。」

「いや、お茶なんかいいですよ。それより、おとつあん、あなたは隠しているようなことはないでしようね。」

「隠す。何をわしが隠してる？」

「いや、ぼくはたゞ、はつきりしたことが知りたいのです。それで、何もかも言ってもらいたいと思ってますが。」

「そりゃいったい、なんのこつてす。おきぬがどうかしたんですかい。」

宇平がしらばっくれて、そう言っているのか、行介にはわからなかった。彼は黙ってきぬ子のおき手がみを老人に渡した、老人はしばらくのあいだ、じっとそれを見つめていた。

「あんたは、おきぬをそゝのかして、わしが家出させたとも思ってるんでしょね。——無理はありません。無理はありませんよ。おきぬのことじゃ、わしはあんたに、どんなに、うたぐられたって、しかたがねえんだから。」

「いや、うたぐるってわけじゃありませんが、あなたなら、しんみの親だから、何か知っていることがあると思つて……」

「いゝや、わしはなんにも知りません。さつきも言った通り、もう半つきもこねえんですからね。」

「じゃ、今度のことについて、何かうすく、気がついてたつていうようなことはないんですか。」

「そんなことあ、なんにも……」
宇平はまぶたに指をあてて、涙をおさえながら、しく／＼泣きだした。

「どうしたんです。おとつつあん。ぼくが言ったことが気にさわつたのですか。」

「そ、そんなことじゃあ……」
「ぼくは、あまり思いがけないことが起こつたので、かなりあわてていたので、失礼なことを

言つたかも知れませんが……」

「いゝえ、けしてそんなことじゃござんせん。わしはあんたに申しわけがなくて、申しわけがなくて……」

「おとつつあん、まあ、そんなに泣いたつて……」

「あんたのおかげで、あれの身も定まり、わしは安心していたのに。……こんな、こんなことをしてかしゃがつて……」

「今さら、そんなことを言つたつて、しかたがありませんよ。それより、どこへ行つたか、そのほうの心あたりはありませんか。」

「わしには皆目わかりません。」
「弱つたな。まさか、死ぬようなことはないだろうな。」

「わしもそれを心配してるんだが、なにしろ、なんで家出したのか、それがわからねえんだから……」

一ノ十

ふたりはきぬ子のことについていろ／＼話合つたが、結局、「どうしたんだらう。」「どこへ行つたんだらう。」をくり返すだけに過ぎなかつた。警察に捜索ねがいを出したものでらうか、ということも、無論、話題にのぼつたけれども、行介の職掌がら新聞に出ることは困るので、それはもう少し待ってみることにした。

何かわかつたら、お互に知らせ合ふことにして、行介は宇平のうちを出た。宇平がなんにも

知らないということは、行介には意外な気がしたが、しかたがなかつた。

風は昼まよりも強かつた。正面を向いたまゝ歩いては行けないくらいだつた。彼は逆流を乗りきる時のように、あたまを前に突き出し、からだを少し斜にして、黒い流れのなかを押し進んで行つた。屋根の上のトタンのカンパンが、騒々しく両がわでわめいていた。停留所には人がけもなかつた。もうかなり遅い時間だが、まだ赤か、うまく行けば青がくるだらう、と思つて、彼はそこに待っていた。星があぶなつかく空に光つていた、今にも風で吹き落とされそうに。

行介は立つたまゝ、片ほうの足の甲の上に、片ほうの足の裏をかさねて、感じのなくなつて

いる足のさきをこすり合わせた。
電車はなか／＼こなかつた。彼は未練のような気がしながらも、きぬ子の手がみを、そつとふところから出した。そして、赤い街燈の下で、もう一度それを開いた。

しかし、最初の二字を読んだだけで、彼の目はまっ暗にされてしまつた。
「先生、おゆるしください。」

その先生という字が——画(カク)はすくないが、妙にとげ／＼したそのもじが、鋭く彼のひとみに突き刺さつた。目の前がまっ暗になつたと思つた瞬間に、その暗い中に動いているあるものを、行介はきらりと感じ取つた。さつき読んだときは、どうしてこれがわからなかつたの

であろう。自分が教師をしているものだから、先生と呼ばれても、べつに気にもとめずに、読みすごしてしまつたが……。

なるほど、いま自分は教師をしている。そして、きぬ子もまたその教え子であつたにはちがいない。しかし、彼は今その夫であり、彼女はその妻ではないか。自分の夫を、手がみのなかで先生と書くものがどこにあるう。なぜ、「あなた」と呼びかけないのだ。なぜ、「あなた」と書けなかつたのだらう。あるいは、不用意に、ひよつとこの字を使ったのだとしても、その不用意のうちこそ、恐ろしい真実がこもつてゐるのだ。

結局、ふたりのあいだは、先生と生徒との關係に過ぎなかつたのではなかつたか。彼がどんなに彼女を愛していても、彼女は、彼を先生以上には感じてゐなかつたのではなかつたか。

「あい変わらずだね。」と、友にひやかされるほど、彼はきぬ子をいつくしんできた。この心が、きぬ子には通じなかつたのだらうか。彼女には、教壇に立つてゐる彼の姿ばかりが目について、牛肉をぶらさげて帰る彼、火バチのそばにすわつてゐる彼は、少しも目にはいらなかつたのではなからうか。もつとも、園田のような男となら、彼はすいぶん、冗談を言つたり、ふざけたりするのだが、きぬ子の前では、ほとんど、そんなことをしたことがなかつた。もと彼女の教師であつたから、厳格に構へてゐる、というような気もちは少しもないのだけれども、きぬ

子にしてみれば、そこにものたらぬ何かがあつたのではあるまいか。それが、ついに「先生」になつてしまつたのではあるまいか。

さつき宇平が泣きだしたとき、これもまた例の手ではないか、という疑いが、まだ、あたまのどこかにあつた。しかし、今度の事件は、たしかに、おやじのしわざではない。この「先生」こそ、彼女が離れて行つた原因にちがいない、と行介は思つた。

一ノ十一

やつと電車がきた。赤だつた。行介は急いでそのほうに走り出そうとしたが、どうしたのか、足が一步も前に出なかつた。

「乗らないんですか。」

車掌はベルのひもをつかんで、せつかに言つた。

「いえ、乗るんです。乗るんです。」

行介はあわててそう答えたが、どろ田にはまりこんだ時のように、からだだけ前にのめるばかりで、足は少しも動かなかつた。しかし、急いで彼は両手を電柱に突つぱつて、ぎゅつと腰を浮かした。もげるように足が土から離れた。彼はやつと電車にすがりつくことができた。

「足が悪いんですか。」

彼を引っぱりあげながら、車掌は尋ねた。

「いえ、こんなことは、めつたにないんです。……どうもすみません。」

札を言つて、行介は隅のほうに腰をおろした。

実際、こんなふうには歩けなくなることは、そうしょつちゅうあることではないが、しかし、これはけつして突然のできごとではなかつた。腹の中では、また例のやつが起こつたなど、彼はまゆをひそめないわけにはいかなかつた。この一、二年、忘れたように引こんでいたマヒ症が、急に襲つてきたものらしい。寒いなかに長いあいだ立っていたことが、悪かつたにちがいない。それに、久しくやめていた酒を、今夜は少し飲み過ぎた。

歩き出しは悪いけれども、二、三步あるくと、あとはそう苦しいことはなかつた。彼は電車をおりてから、歩いてうちに帰つた。いつも前こごみのからだを、いつそう前こごみにして。

その晩は、ほとんど眠れなかつた。眠つたと思つくと、すぐ目がさめた。フェルトのゾリーがあわたとしく駆けて行くと思つたとき、彼の目は急に開いた。隣と共同で使つてゐる裏ぐちの水道の水おとが、柔らかに響いてきた。隣のうちでは、もう起きたらしい。しかし、彼はまた目をつむつてしまつた。その次ぎ目をあいたときは、明かるい光が棒のように、あま戸のすきますきまに突つ立つてゐた。

いつもなら、もう、とうに火も起こつており、ごはんもできてゐる時間だが、それをこれから自分でやらなくてはならないのだ、と思つと、彼は起きあがる勇氣がなかつた。目をあいたまま、彼はいつまでも、ふとんのぬくもりのなかに浸つてゐた。つめたい風が時々かかふとんの下に

忍びこんで、肩のあたりを刺すようにかんだ。煮め屋の鈴の首がまわってきたころ、彼はやっと起き出した。しかし、起きあがるときには、犬のように両手を下に突っぱらなくてはならなかった。

あま戸をあけて、顔を洗って、火を起こした。しかし、めしをたくことは、めんどうだった。

彼は茶ダノスの戸だなをあけて、塩せんべいを見つけた。それを彼は朝はんのかわりにした。せんべいが齒のあいだでポリ／＼砕ける音が、へんに彼の心を感傷的にした。朝っぱらから塩せんべいをかじりながら、涙ぐむやつもないものだ、と思った。ふと、「へをひつておかしくもなしひとり者。」という、昔の川柳があったまに浮かんだ。ひとり者という連想が、そこへ導いたのかもしれないが、こんなときにこんな句を思い出したのは、自分にもわからない気もちだった。

「用ききなん軒もきた。やお屋、さかな屋、さか屋、せんたく屋。——何がいるのか、何を頼んでおいたらいのか、彼は始末に困った。

いや、それよりも人と口をきくことが、もつとうるさかった。彼はどれも一様にこたわってしまつた。

「屋ちかくに、ソバ屋の出ませ持ちがきた。

「道具をいたゞいてまいります。」

「道具？」

「うちが、ちがやしないかい。ほくんところじ

や、きのう、ソバは取りやしなかつたよ。」

「あの、おや子を持つてまいりましたんで。」

「おや子なんか、なお取りやしないよ。」

「いゝえ、てまえが持つてまいつたんですから、まちがいはございませぬ。——あ、そこにあります。その戸ダノの上のところに。」

ネズミイラズのわきの高い戸ダノの上に、にしき手の大きなドンブリが二つ、塗りのはげた横ゼンに載せておいてあつた。

一ノ十二

台どころは、ゆうべ半ナベを探すとき、ずいぶん、あちこちかきまわしたのだが、引きだしや戸ダノの中ばかり注意して、そんな上のほうには目を配らなかつたものだから、行介はドンブリがおいてあることなどは、まるで気がつか

なかつた。

「おかしいな。おや子なんか、だれが食つたのかね。」

「さようでございますね。……」

出ませ持ちは、そんなこと、おれの知つたことかい、と言わぬばかりの顔つきをしていた。

「いったい、だれが頼みに行つたんだい。」

「おたくの奥さんです。」

「ふむ。なんじごる。」

「さようでございますね。一時すぎ、まだ二時にはなつていなかつたと思ひますが。」

「君、ちよつとそこへかけてくれなにか。少し君に聞きたいことがあるんだけれど。」

「……………」

「君がそれを持つてきたとき、うちにだれかお客がいなかつたかしら。」

「え、どなたかおいでになつていたようです。」

「そ、それは、どんな人？」

「……………」

「いゝや、男か女かつて言うのだ。」

「男の方のようでした。」

「君、その人の顔を覚えていないかね。」

「いゝえ、わたしはたゞ、うしろからちよつと見ただけです。だから、なんにも知りません。しかし、洋服のぐあいが、どうも学生さんのように見えました。」

「学生！ で、髪の毛はのばしていたかい。」

「そうですね。どうも、そんなこまかいところは……………」

「じゃ、目がねをかけていたかどうかもわからないかね。」

「わかりませぬね。わたしはたゞ、おあつらえを持つてきただけなんです。——あの、道具をいたゞいて行つてもよろしゅうござんすか。」

「すまないが、君、あがつて、それを持つてつてくれないか。」

行介は女房とだれか知らない男とが、ハシをつけたドンブリを取つてやるために、わざ／＼立ちあがるのは、不愉快だった。

出ませ持ちはゾリをぬいで台どころにあがり、戸ダノの上から、からになつて